

研究助成 研究成果報告書（HP掲載用）

研究課題名：看護師が提供するとろみ水に関する実態調査

所属大学・機関名 三重大学医学部附属病院 氏名 田中 萌

【研究要旨】（研究要旨を 200～300 文字程度でご記入ください。）

摂食障害患者が水分を摂取する際、誤嚥の危険を軽減するためとろみ水を提供する機会が多い。しかし看護師が提供するとろみ水はしばしば粘度にばらつきが生じ、かえって誤嚥や窒息等の危険を高めてしまう。本研究では、当院で提供されているとろみ水の粘度のばらつきの有無について実態調査を行った。

調査の結果、現状当院で提供しているとろみ水の粘度には差がないことが判明した。とろみ水作成時の注意点を看護師具体的に示していることや、摂食嚥下支援チームの活動が関与していると考えられた。今後も継続して統一したとろみ水を提供できるよう、注意点を具体的に示したり、指導の機会を設け、看護師の意識向上や知識の統一化を図り、安全な経口摂取を確保できるよう努めることが必要である。

【研究目的】

当院で看護師が作成し患者に提供しているとろみ水の粘度のばらつきの有無について、実態調査を行った。

【研究方法】

摂食嚥下リハビリテーションを受けている患者のうち、水分摂取の際に看護師が作成したとろみ水を摂取している患者について、患者に提供されるとろみ水を 2 日間採取し、シリンジ残存量テストにてとろみ水の粘度を測定した。シリンジに残存している液体量の 2 日間の差、すなわちばらつきを調査した。とろみ水の残存量が 2 日間で 1ml 以上差がある場合に、とろみ水の粘度の「ばらつきがある」と判断した。

【研究結果】

調査を行い、10 人分のとろみ水の採取と粘度の測定を行うことができた。その結果、2 日間のとろみ水の粘度の差はいずれの場合も 1ml 以下であり、またとろみの粘度の差の平均は 0.43ml であった。とろみ水の粘度のばらつきはないという結果となった。

【考察】

今回、患者に提供されているとろみ水の粘度の差はないという結果になった要因として、①とろみ水作成時の注意点を看護師に具体的に示していること、②摂食嚥下支援チームの

活動が関与していると考えた。

1. ねろみ水作成時の注意点を看護師に具体的に示していることに関して

現在、摂食嚥下リハビリテーションを受けている患者に対し、ねろみ水作成時の注意点として増粘剤の具体的な使用量や、飲水・摂食時の注意点を詳細に患者カルテに記載している。

ねろみ水の粘度が異なる要因として、ねろみ付加に関する意識や知識が関与しており、パンフレットの導入により、医療従事者のねろみに対する意識の向上や患者指導へ有用であることや、ねろみ剤の適切な溶解方法の指導が適切なねろみ水の作成に効果的であることが先行研究で示されている。当院ではパンフレットの使用や直接指導は行っていないが、増粘剤の使用量を明確に示していることが、パンフレットや指導と同等の効果を得られ、意図せずねろみの統一につながったのではないかと考える。今後も引き続き具体的な注意点を看護師に示していくとともに、適切なねろみ水の作成方法について指導の機会を設け、看護師の意識向上や知識の統一化を図り、適切で統一されたねろみ水の提供ができるよう努める。

2. 摂食嚥下支援チームの活動について

現在当院で摂食嚥下リハビリテーションを受けている患者は、すべて摂食嚥下支援チーム介入対象となっている。チームでは週1回カンファレンスを行い、嚥下造影検査等の検査結果をもとに、摂食嚥下障害への対応方法を検討している。対応方法についてはカルテ記載や言語聴覚士を通し、フィードバックを行っている。定期的な評価とフィードバックを行うことで、患者の状態に即した対応をサポートすることができ、統一したねろみ水の提供に関与できていると考える。

【結論】

当院で看護師が作成し提供しているねろみ水の粘度は、ばらつきがないということが判明した。その要因として、ねろみ水作成時の注意点を看護師に具体的に示していることや、摂食嚥下支援チームの活動が関与していると考えた。今後も継続してねろみ水作成時の注意点を具体的に示したり、適切なねろみ水の作成方法に関する指導の機会を設け、看護師の意識向上や知識の統一化を図り、安全な経口摂取を確保できるよう努めることが必要である。